

テキスト 出エジプト記 16章

〈背景と文脈〉

イスラエルの人々は約束の地に向けて歩みだした。その旅は、彼らを導き、必要を満たして下さる主の御力を体験する機会でもあった。15章22～26節には、主が苦い水を甘い水に変えられた奇跡が記されている。その後、彼らはエリムという名のオアシスにたどりついたが、そこには十二の泉と七十本のなつめやしが茂っていた。彼らはそこに宿営した(15:27)。主は自然の恵みをもって彼らを養われた。

〈民の不平と神の約束〉(16:1-12)

イスラエルの共同体全体は旅を続け荒野に入った。エジプトを出てからちょうど一カ月が経過していた(1)。それまでは、エジプトの地から携えてきた食べ物や自然の恵みがあった。しかし、それが底をついたとき、彼らは主のみわざを思い出すことなく、荒野で飢え死にするぐらいなら、十分な食物があったエジプトで死んだ方がましだった、とモーセとアロンに不平を言った。彼らは、彼らを養うことのできる全能の神を信じなかった。しかし、彼らの不信仰にもかかわらず、主は、天からパンを降らせる、とモーセを通して約束された。これには二つの目的があった。ひとつは「わたしは、彼らがわたしの指示どおりにするかどうかを試す」(4)、と言われたように、御言葉に対する民の従順さを試すためだった。もうひとつは、「あなたたちは夕暮れには肉を食べ、朝にはパンを食べて満腹する。あなたたちはこうして、わたしがあなたたちの神、主であることを知るようになるためである」(12)、と言われたように、主はこの奇跡を通して、主こそ彼らの神であることを民に知らせようとなさったのである。主はご自分の民が困難に直面することを許されるが、それによって彼らが主の御力を体験し、それを通して主が彼らの神であることを、深く知ることを望まれたのである。

〈天からのマナ〉(16:13-36)

主が約束されたように、夕方にはうずらが飛んできた(民数11:31を参照)。朝には、のちに彼らがマナと名付けたもの(31)が彼らの食物として与えられた。それは、薄くて壊れやすく(14)、色はコエンドロの種に似て白く、蜜の入ったウェファースのような味がした(31)。民はそれを集め、臼で粉にひくか、鉢ですりつぶし、鍋で煮て菓子にした。それは、こくのあるクリームのような味がした(民数11:8)。主は彼らに、毎朝一人当たり一オメル(約2.3リットル)を家族の数に応じて集めるように命じられた。

マナが自然の産物であるか、あるいは主が与えられた特別な賜物であるかについては議論がある。しかし、それが自然の産物であろうと、主が民のために特別備えてくださった食物だったことには変わりはない。なぜなら、それが四十年もの間、多くの民を養うに十分であったこと、通常、翌朝には虫がついて臭くなったが(20)、安息日の前日に集めたものは翌日になっても臭くならなかったこと(24)、また彼らが約束の地カナンに入り、その地の産物を食べることができるようになったとき、マナが止んだこと(ヨシュア5:12)などは、このことが神の摂理によることを裏付けている。主はイスラエルの民の旅路の間、マナをもって彼らを養い通した。

マナは毎朝集める必要があった。何人かはモーセに聞き従わず翌朝まで取っておいたが、臭くなった。またモーセは、六日目には二日分を集めるよう命じた。それは、七日目の主の安息日を休むためだったが、そのときには臭くならなかった。後に主は、民の益のために、十戒で安息日を定められた。モーセに聞き従わず、安息日に集めようとした者たちがいたが、何も見つからなかった。主は、彼らが主の指示通りにするかどうかを試す、と言われた。主は、ご自分の民が御言葉に従順であることを求められる。(後藤公子)

テキスト 出エジプト記 16章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問69, 70, 71, 49

〔単元のねらい〕

天からのマナの出来事は、律法授与の出来事と重なっている。ただ肉体の糧を与えるだけでなく、霊的な糧によって日ごとに養われること、また、七日目の安息が不可欠であることが指し示されている。御言葉によって霊的に養われてこそ、神の民として、神に導かれ、信仰を養われて生きることができる。マナは、そのことを教える実物教育であったと言えるだろう。その点で、今日のわたしたちに与えられている、御言葉の説教と聖餐の礼典との関係に似ている。説教も聖餐も共に主イエス・キリストを指し示す。そして、聖餐は目に見える御言葉である。説教で示される神の恵みを目に見える仕方ですしづけ、保証しているが、同時に、見えない神の御言葉を不可欠としている。子どもたちには、マナによって肉体が養われるように、神の御言葉によって霊的に養われることの大切さをはっきりと教えたい。なお、暗唱聖句として申命記を挙げたが、ヨハネ福音書6章51節でもよいであろう。

「天からのパンによって生きる」

エジプト軍から逃れたイスラエルの人たちは、主なる神さまに導かれて、シナイ半島の荒れ野に分け入りしました。さて、エジプト軍が海の水の中でおぼれてしまうという、たいへん大きな出来事を見せられて、イスラエルの人たちは、主なる神さまに信頼して、荒れ野の旅を始めることができましたでしょうか。いいえ、イスラエルの人たちは、神さまに信頼していることができず、たちまち不平不満を言い始めたのです。

そのきっかけは、食べ物がないことでした。みんなも、食べ物がないとつらいですね。おなかがすいて、食べ物がないと、いらいらしてきます。イスラエルの人たちも、おなかがすいていらいらして、そして、荒れ野でどうやって食べ物を手に入れるのか、不安にもなったのでしょうか。イスラエルの人たちは言いました。「こんなところで飢えて死ぬならば、エジプトの国で死んだほうがましだった。エジプトでは、奴隷ではあったけれども、おなかいっぱい食べることができた。食べ物のことで心配することはなかったのに」。

けれども、荒れ野の旅をするのですから、イスラエルの人たちも、最初から、食べ物には不自由すると分かっていたでしょう。ですから、食べ物

がないというだけでなく、まだ神さまをそこまで信頼することができていなかったということでしょう。不信仰だったのです。

その不信仰にもかかわらず、神さまは憐れみ深いお方でした。主なる神さまは、モーセをとおしてイスラエルの人たちにおっしゃいました。「見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。民は出て行って、毎日必要な分だけ集める。わたしは、彼らがわたしの指示どおりにするかどうかを試す。ただし、六日目に家に持ち帰ったものを整えれば、毎日集める分の二倍になっている」。神さまは、イスラエルの人たちに、マナと呼ばれる食べ物を与えてくださいました。明け方、宿営の周りに露が降り、その露が蒸発すると、地表を覆うように、薄くて壊れやすい白いものが残っています。蜜の入ったウェファースのような味がする食べ物であり、それがマナでした。

神さまは、マナを毎日与えてくださいました。イスラエルの人たちは、毎日、朝早く、外に出て、そのマナを集めました。集めてはかってみると、一人一オメルずつ、家族ごとに必要な分がありました。多すぎることもなく、少なすぎることもな

く、ちょうどよい量が与えられました。また、毎日、日ごとに与えられ、その日の分を次の日に残しておく、虫がついたり腐ったりして、食べることができませんでした。さらに、六日目に集めてはかってみると、ちょうど二日分与えられていました。六日目に二日分与えられて、七日目の朝はマナは与えられませんでした。イスラエルの人は、七日目の朝、外に出て探してみましたが、マナを見つけることはできませんでした。

このマナは、イスラエルの人たちの食べ物であり、空腹を満たすものでした。そして、それだけではありません。イスラエルの人たちに、御言葉に聴くことによって神さまに養われることを教えています。神さまは、とてもいいねいに、ご自身の御言葉をもってマナの集め方を教えられ、七日目には休むことまで教えられました。イスラエルの人たちは、このマナをとおして、神さまの御言葉に養われることを学びました。

神さまは、申命記で、こうおっしゃいました。「主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった」（申命記8:3）。このマナの出来事ののち、イスラエルの民は、神さまから十戒の御言葉を与えられました。その神さまの御言葉に聴き従わなければならない、それに先だって、日ごとに神さまに養われることを教えられました。すなわち、肉体のことだけではなく、霊的にも、日ごとに神さまに養われるべきなのです。天からのパンであるマナは、この意味で、神さまの御言葉に養われることを指し示すしるしでした。イスラエルの人たちは、エジプトから導き出され、神の民とされたのであって、神さまの御言葉に聴き従う生活を始めます。御言葉に聴き従って歩むときに、人は、神さまに信頼して、神さまに導かれて歩むことができるのです。

わたしたちのために十字架につけられ、復活してくださったイエスさまは、こうおっしゃいました。「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる」（ヨハネ福音書6:51）。このイエスさまが来てくださって、今や、十字架と復活のイエスさまが天からの命のパンです。わたしたちが生きるためには、この霊的な糧、イエスさまの御言葉こそが必要です。イエスさまの御言葉に養われて、わたしたちは、神の民として、神さまに導かれて歩むことができます。

イスラエルの人たちが、日ごとにマナによって養われたように、今のわたしたちも、天からの命のパンであるイエスさまの御言葉によって養われます。一日一日、その日ごとに、聖書の御言葉を読み、祈りをささげましょう。とくに、朝早くマナを集めたように、朝起きてすぐに御言葉を聴き、祈ることができるならば、その一日、神さまの祝福が豊かでしょう。そして、神さまの祝福は、日ごとにわたしたちに十分であることを知しましょう。神さまは、一日に必要な分だけマナを与えて養ってくださいました。次の日のためにマナを取っておいても、それは無駄になってしまいました。そのように、わたしたちも、次の日のことを思い悩むのではなく、むしろ神さまに期待して、神さまに祈り求めることが大切です。

また、七日目には二日分与えられました。それは礼拝するためです。今、わたしたちは、週の最初の日に教会に集まります。お友だちと一緒に神さまの御言葉を聞き、礼拝をささげます。礼拝をとおして神さまと出会うことへと導かれます。

わたしたちには、このような命の糧が必要です。神さまの御言葉の糧に養われ、イエスさまの御声に聴き従って、神の民として歩み続けることができます。わたしたちには、そのために、天からの命のパンが与えられています。何と感謝なことでしょうか。（望月 信）

[今週の暗唱聖句] 申命記 8章3節 (一部)

人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる。

〈ねらい〉

神さまが私たちの必要を満たし養ってくださること、また、体の食べ物だけでなく、御言葉によって養われることの必要を覚える。

〈展開例〉

みんなに質問です。お空から降ってくるものと思ったら、何が思い浮かびますか？

雨。そうだね。雪。そう、冬にはきれいな雪が降りますね。他には？ 光。すごい！ よく気がついたね。明るくてあったかい太陽の光。

きょうのおはなしの中にも、天から降ってきたものがでてきたよね。そう、なんと、お空からパンが降ってきたんだって！ びっくりしたよね？

奴隷として働かされていたエジプトから、神さまはイスラエルの人たちを救い出してくださいました。でもイスラエルの人たちはね、食べ物もなんにもない荒れ野に入ったときに、とっもおなかが空いてしまって、神さまに不平、文句を言い始めたんです。「こんなところでおなかが空いて死んでしまうなら、エジプトにいたほうがよかったです！」

それをお聞きになった神さまは、怒ってしまわれたかな？「お前たちのことなんかもう知らない！」と、お見捨てになったかな？

そうじゃないね。神さまはおっしゃいました。「わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる」

たしかに荒れ野を見わたしても、食べるものがなんにもなかったかもしれない。でもイスラエルの人たちは天を見上げることを忘れていたんだ

ね。私たちが生きるのに必要なごはんを与えてくださるのは、天にいらっしゃる神さまなんだね。

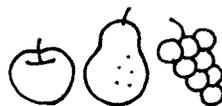
神さまはみ言葉通り、毎朝パンを与えてくださいました。朝起きてテントを出たら、荒れ野いちめんを白いマナが覆っていたんだって。それでイスラエルの人たちはどうしただろう？「わーい！ やったー！」と叫びながら、めいめい自分の好きなだけとればよかったのかな？

ちがったよね。み言葉をしっかり聴いて、神さまのおっしゃった通りにパンを集めたんだね。毎日決められた分だけ、きっちり。七日目は安息日だから、その日ちゃんと休むために、六日目には二日分。み言葉をちゃんと聴かなかった人は七日目にパンを取りに出ただけ、その日はなんにも見つからなくて困ってしまいました。

イエスさまは、人はパンだけでなく、神さまのみ言葉によって生きる、と教えてくださいました。だからわたしたちも、神さまのみ言葉をちゃんと聴くことを大切にします。わたしたちを養ってくださる神さまのみことばをちゃんと聴くこと、それを忘れないでいようね。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、いつもわたしたちにごはんを与えてくださってありがとうございます。聖書を読むこと、こうして教会でみ言葉を聴けることをありがとうございます。いつもしっかりみ言葉を聴いて、それに従えるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りいたします。アーメン。



〈ねらい〉

私たちは、神様のお言葉によって、目に見えない魂が豊かに養われる。

〈はじめに〉

分級の奉仕は、子どもの信仰教育のために神様に用いて頂く愛の働きです。ここに集う全ての子どもに、神様の愛が伝えられ、愛して下さる神様がどういうお方なのか、ますます知ることができるよう、今日の分級も主が祝福して下さるよう祈りましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①イスラエルの人々は、モーセとアロンにどんな不満を言いましたか。(3節)
- ②神様はモーセに何を約束されましたか。(4節)
- ③神様が与えてくださった天からのパンを何と言いましたか。(31節)

〈展開例〉

私は今、この右手に何かを持っています(クッキーでもパンでもいいです)。今はこのハンカチでカバーしているので、みなさんには分かりません。何でしょう? 何があると思いますか?

(カバーを取る)「これは一体何でしょう?」今、これを見て、みなさんも「これは何だろう? これなあに?」と言いました。さてさて、今日読んだ聖書にも同じ言葉が出てきましたね。15節「これは一体何だろう」。イスラエルの人々は、何を見て、これは一体何だろう? と言いあったのでしょうか? 聖書にはちゃんと、その理由が書いていましたね。

イスラエルの人々は、神様に助けられて、エジプトを脱出しました。エジプト軍が追いかけてきても、神様が助けて下さって、海を渡ることが

出来て、逃げることができました。どんな時も神様が助けてくださることを体験して、その都度、神様は素晴らしいと喜んでいたのに、またまた、その喜びが消えて、不満ばかり口にするようになりました。

「お腹がすいたあ、こんな事だったらエジプトにいたほうが良かった! 私たちを殺すつもりなのか!」とぶつぶつモーセさんとアロンさんに言い始めたのです。ついこの間、神様に助けていただいたのに、神様に信頼することをもう忘れてしまったのです。

それを知った神様はその願いを聞いてくださいました。神様はモーセに「あなたがたのために天からパンを降らせよう」と言われました。朝早く目を覚ますと、地面に白い薄いパンのようなものが一杯落ちていました。「これは一体何だろう」。みんなは言いました。モーセは「これは神様が用意して下さった食べ物です。今日一日分だけ集めなさい。余分に集めると腐ってしまいます」と言いました。みんなは喜んで集めました。それをマナと呼びました。

毎朝毎朝、朝起きるとこのマナを集めることができたので、お腹がすいたあと不満を言う必要はなくなりました。六日目は二日分集めて、七日目はお休みしました。このマナを通して、イスラエルの人々は神様の御言葉に養われることを教えられました。

「これは一体何だろう?」今、私たちは、神様から、いのちの御言葉が与えられています。毎朝毎朝、期待と信頼を持って、この神様のいのちの御言葉をいただくことが、私たちが神様の子どもとして成長する大事なことです。

〈お祈り〉

神様、私たちは小さな子どもですが、神様を知る心は、どんどん大きく成長できますように。神様のお言葉をありがとうございます。アーメン。

〈ねらい〉

わたしたちには、ご飯やおやつや飲み物が必要なように、いのちの糧（神さまのことば）が必要だということを、子どもたちと共に教師も今朝、御前にひざまずいて教えられたい。

〈ワーク〉

【3節】 イスラエルの人々はモーセとアロンに不平を言いました。どうしてかな？

()

【4節】 そこで神さまはモーセに「天からパンを降らせる。」と言われ、また彼らを「試す」とおっしゃいました。

何をテストされるのかな？

()

【13・15節】 夕方になると□□□が飛んできて人々は肉を食べることができた。朝には□□が降りてきて食べることができた。

【18・20節】 テストに合格したのはどちらの人だと思いますか？

A「多く集めた者も余ることなく、少なく集めた者も足りないことなく、必要な分を集めた。」(18節)

B「何人かはその一部を翌朝まで残しておいた。虫が付いて臭くなった」(20節)

【22・23節】 安息日の前日は、パンを特別に何日分集めてもよかったでしょう。□日分。なぜですか？

A：なまけるため

B：礼拝するため

【31節】 イスラエルの人々はそのパンを何と呼びましたか？

□□

【35節】 イスラエルの人々はそれをどのくらいの間食べたのですか？

□□年

【決心】 私たちにも、神さまからのいのちのパンを与えられています。朝早くマナを集めたイスラエルの人たちのように、私たちは朝早く起きて何をすべきでしょうか？

()

〈祈り〉

私たちに毎日必要なものを与えてくださる神さま。あなたの尊いお名前を賛美します。私たちはおなかがすいたり明日のことで心配なことがあったりすると、すぐに文句を言ってしまいます。でも神さまは一日に必要な分だけマナをくださったことを勉強しました。明日のことを心配するのではなく、きっと神さまが私を養ってくださると信じて歩み続けることができますように。あなたにおゆだねします。

〈答え(例)〉

【3節】

おなかがすいたから、明日のことが心配になったから、奴隷でいたほうがよかったと思ったから、など

【4節】

神様の言うことをキチンと聞けるかどうか。心配になって必要以上にとってしまったりしないか、など

【13・15節】 うずら マナ(パン)

【18・20節】 A

【22・23節】 2日分 B

【31節】 マナ

【35節】 40

【決心】

ここは自由に。「みことばを聞く、聖書を読む」といった答えでもよいが、それに固執するものではない。

〈ねらい〉

神様は、愛する者達の必要を満たして成長させられる方であることに感謝する。

〈展開例〉

①今日は不満をもらす子どものようなイスラエルの人達に、神様が恵みを与えて成長させてくださったお話し。不満とは何だったか？それは空腹。「腹が減った！ 飯がない！ 神様に従って飢え死にするくらいなら、神様を知らないエジプト人達と腹いっぱいですごすほうが良かった」イスラエルの人達は、荒れ野を通過して神様の約束の地を目指す旅の中で、「あれがない！ これがない！」と不満をもらす。

Q. 皆も神様が約束された天国へ向かう人生の旅を歩んでいる。そんな中で「あれがない。これがない。神様を大切にしている生活をしていたら、欲しいモノが手に入らない！」こんな思いを抱くことはないか？ 学校の成績、部活のポジション、恋人との時間、友達との時間、「これが無かったら自分の人生は台無しだ！」血気盛んな中学生なら、色々と欲しいモノがあって当然だ。

②今日の箇所ではイスラエルの人達が欲しがったモノは「食べ物」。神様はその必要を満たしてくれた。食べ物というのは生きるために本当に必要なモノ。神様と言う方は、みんなが神様と一緒に生きていくのに必要なモノを与えてくださる、そういう御方である。ただ、今回、神様はイスラエルの必要な「毎日のパン」をポーンと手渡したわけではない。今回、神様がイスラエルに与えたパンには特別なネライがあった。

③それは「神様の語る言葉に従うことで、人生は守られるのだ」とイスラエルが知ること。だから、

神様はパンをもらうための色々なルールを設定された。単純に欲しい者を与えて食いつなぐだけの生活ではなく、神様の思いに従うことで、必要を満たされていく、そういう生活を神様は与えられた。神様が与えられたのは、体が必要とするモノだけではない。「神様に従えばすべて大丈夫！」という人間にとって一番必要な心、神様を信じる心を神様は与えられた。神様を信じて生きることが、まだまだ初心者で子供みたいなイスラエルの人達を神様は大人な信仰者へと育ててくれる。それは「神様の言葉に従う毎日」の中で培われていく。

④君達も大人になる旅の途中にいる。「あれがない！ これがない！」君達は毎日に足りないものを数え上げるかもしれない。「〇〇を得るためには神様に従ってなんかいられない！」こんなことを思うかもしれない。だが、神様を無視して手に入れるモノなんていうのは必ず最後には手元から無くなる。生きている間に失う人もいれば、死んですべてを失くす人もいる。欲しいモノがあること自体は悪くない。成績や交友関係は君達にとって生きるか死ぬかの大問題だ。しかし、大事なことは神様に従うことによって、それらを手に入れること。神様は君が生きるのに何が必要か、学校の先生以上に、君の親以上に完璧にわかっている。そして、君達が生きるのに必要なすべてのことは神様の言葉である聖書の中にある。神様の言葉に従うことで子供から大人へと育てられていく、君達にそんな毎日が与えられることを願い祈りたい。

〈祈り〉

私達の必要を知っておられる神様。欲しいモノは色々ありますが、神様に従う中で本当に必要なモノが満たされますように。アーメン。